4.65が適当と考えた．

*

6. ペプタイド・ホルモンの Radioimmunoassay について

吉田健生　磯部　迪　野手信哉
（岐阜大学　第一内科）

近年，インスリン，成長ホルモンなどのペプタイドホルモンの放射免疫学的測定法の進歩によりそれらホルモンの生理的，病的分泌動態が明らかにされつつある．

しかし．その測定法自体にいくつかの問題点が残されている．今面われわれは特にインスリン，成長ホルモン測定法に関してそうした問題点を指摘するとともに，若干の臨床的データを紹介する．

質問：滝野　博（ダイナボット RI 研究所）　Sample 血清は何倍希釈が適当とお考えでしょうか？　原血清を使用すると何らかの血清の影響がでてくるように考えられますが……．

答：吉田健生（岐阜大学　第一内科）　Sample の希釈はできればしないままの方が誤差が少ないと考えています．2倍，10倍，原血清とを比較しましたが2倍希釈までですと原血清と大差はありませんでしたが10倍ですと原血清との値の差は大でありました．

*

7. 乳癌のホルモン依存性

後藤紀夫
（名古屋大学　第二内科）

従来，末期乳癌の内分泌療法は，無差別に，または患者の内分泌環境を基準にして行なわれてきた．乳癌を腫瘍側のホルモン依存性をみるため，われわれはスライスした腫瘍組織を 37 °C 30 分間，^{3}H-Thymidin と共に incubate し testosteron または estradiol を加えた場合の DNA 内への取り込みによりそのホルモンの依存性の有無を決定している．臨床成績上，依存性のある腫瘍を持つ患者に行なった卵巣，副腎摘出術，または大量ホルモン投与は転移巣の退縮など，良好な成績をおさめている．

生物学的に性ホルモン依存性の明確な動物乳癌三種に行なった検査でも，その特性と全く一致した傾向の結果がでている．

*

追加

7' 手術侵襲時における血漿 Aldosterone の変動

成瀬隆吉
（名古屋大学　第二外科）

近年の Steroids 分析学の発達は血清中の aldosterone 濃度を測定することを可能にした．石橋は thin layer chromatography を Kliman & Peterson が発表した Double Isotope Derivative Dilution Method に応用して微量の血清 Aldosterone を測定している．この方法を使用して，正常人並びに諸種疾患患者の血漿 Aldosterone 濃度を測定すると共に良性胃疾患患者6例の胃切除術時における血漿 aldosterone 濃度を測定し，術中におけるその変動を追求すると共にその変動の原因を考察した．10例の正常人の血漿 aldosterone 濃度は平均 5.52（SD ±3.32）ng/dl であり，手術侵襲時には2峯性の変化を示した．

*

8. ^{131}I-MAA による肺スキャンの経験

渡辺　令
（名古屋鉄道病院　放射線科）

^{131}I-MAA を静注後肺スキャンを行なってえたシンチグラムと肺のX線単純撮影写真とを対比してシンチグラムの果たす役割を検討してみた．肺腫瘍ではX線写真上末梢型の腫瘍陰影は小さな孤在性のものはシンチグラムでは描出が難かしいが，肺門部型では比較的シンチグラムでよく異常所見を示すことが多い．原発性か転移性のものかの鑑別はシンチグラムのみでは困難であった．照射治療後，腫瘍陰影の消失を認め，X線写真ではほとんど正常と認めるようになってもシンチグラムではなお異常所見を呈するものがあるが，これ等は肺線維症をおこした結果と思われた．肺線維症の例ではシンチグラムでその範囲と肺機能の推移の状態がよく観察された．以上より肺のシンチグラムは線単純撮影写真からは十分には観察されない肺機能を示すこと，および手抜が容易であること等から肺疾患の検査としては有意義である．

質問：仙田宏平（岐阜大学　放射線科）　照射前シンチグラムを取っておられると考え，原発性と転移性の肺癌について肺シンチグラム上はっきりした差違は認められませんでしたか．照射後の陰影欠損はその主体がすべて radiation fibrosis によるものと考えた方がよいのではないでしょうか．

Presented by Medical*Online